

## わが道 わが友

ローマ五輪に出場したのを機に、本気でポートに取り組もうと決意したが、体が小さいため、指導者になる道を選んだ。昭和37年春に東大を卒業すると、「若いうちに鍛えなければ世界に通用しない」という理由で、東大ポート部の1年生のコーチに就いた。家庭教師などをしていたが食べていくのは難しいので、その年の8月に積水化学工業に入社。土、日曜日に後輩を指導するようになった。

コーチに専念したとはいえず、「もう一度選手として」という思いが募り、39年の東

京五輪の予選に挑戦する。今度は東大OB8人でエイトを組んだ。合宿をし、朝4時に起床して練習するという日々を送った。ただ、そのときは日本ポート協会が選抜チームを結成。とにかく強く、その

チームが五輪に出場した。その後には仕事の関係でポートから離れていたが、58年から再び本格的に携わり、同協会の強化部長として1988（昭和63）年のソウル五輪にクルーを送り出した。同協会の会長に就任したのは平成16年。その年のアテネ五輪で日本は見事に決勝に残り、6位に入賞した。



翌年8月には岐阜県の長良川で、日本としては初めてとなる世界ポート日本初開催の世界ポート選手権大会で男子軽量級エイト日本代表チームと（右端が大久保氏）平成17年8月、岐阜県海津市の長良川国際レガッタコース

選手権大会を開催した。56カ国から約1300人が集まったが、成功裏に終わり、感慨深かった。「優れたホスピタリティ」「食事は今までになおおいしさ」「熱心なボランティア」などと選手の評判も良かった。

二五輪の金メダルをはじめ、在籍期間中に6回走ってすべてに勝利を収めた。今でも年に1回は顔を出してくれて、社内の人気も抜群だ。不調が続いているが、最後にもうひと花咲かせてほしい。

国際オリンピック委員会（IOC）の委員も長良川大会の運営を高く評価。2016（平成28）年の五輪は東京だと言ってくれている。ただ、東京には正式なポートコースがない。誘致を成功させるためにも、コースを整備するのが願いだ。また、来月8日からの北京五輪には2クルーを送り出す。ぜひともメダル獲得を成し遂げたい。

五輪といえば、9年から15年まで積水化学に所属していた、Qちゃんことマラソンの高橋尚子選手の話題を避けては通れない。Qちゃんはシド

ところで、ポート競技は2000際の距離でスピードを競う。オールひとこぎで進む距離は約8際なので、250回程度こぐことになる。ポートの長さは約15際。レースで「艇身差」と表現される差は、相手に有無を言わせない絶対的な差だ。それを実現するには、ひとこぎ当たり約5秒ずつ相手を引き離していくことが必要で、ハードなトレーニングが不可欠。会社の仕事も同じだ。例えば、住宅の営業マンに対しては「他社に對しては何をもって5秒の差をつけるのか」と、口を酸っぱくして言っている。

## 「艇身差」もたらす5センチが大事